

主体 美術

SHUTAI-BIYUTSU

主体美術協会は、1964年に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の
集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子方 TEL / FAX 0297(85)6665



T. Yamamoto

矢野 利隆 「気配」

主体展の先輩たち

中嶋 修

主体展を初めて観たのは第20回展、記憶に残った作品が幾つかあった。翌年21回展が初出品、学生の頃である。作者の名前に憶えがあったのは数人。当時会員だった司修さんは「つげ義春短編集」の表紙画を描いた人、紺野修司さんはTV初のアニメ「鉄腕アトム」シリーズの演出も手掛けた初期の虫プロの絵画を担った人、倉石隆さんは松谷みよ子さんの「ふたりのイーダ」の挿絵を描いた人。みな同姓同名ではなく本人だと確信したのは後になってからだった。

「私淑」という言葉がある。色々な展覧会を見て憧れ学んでいく事も私淑のかたちだろうか。江戸時代の初め、徳川家康の計略か、本阿弥光悦の目論見か、当時野党追いはぎも出たという京の都の北の離れた土地に、多芸な職人たちを集め「光悦村」は出来上がった。今で云うなら芸術家村。俵屋宗達はその仲間になり、本阿弥光悦との今に残る造形作品を生み出した。100年ほどち吳服屋の子供であった尾形光琳・乾山の兄弟などが残された宗達の作品に刺激を受け、絵画工芸さまざまな芸術を残したという。そこからまた100年ほどたって大名の子供であった酒井抱一が光琳の作品に惚れて様々な作品を残した。宗達の「風神雷神図屏風」を例にするなら、寸法そのままに光琳が模写し、光琳の作品を抱一が模写し、抱一の弟子の鈴木其一は「風神雷神図」を襖絵としたのはよく知られた話である。国宝、重要文化財などとなり、美術館博物館に残り、この題材は今も描かれ続ける。光琳の名から一文字とった「琳派」とよばれる絵画造形家のつながりの憧れの連鎖を「私淑」という事が多い。狩野派や浮世絵画家たちにある師弟関係親子関係とは違ったつながりであるといふ。

公募団体にはこの「私淑」のつながりがどこかにあればいいと思う。公募団体においても師弟関係親子関係で繋がる事ももちろんあるだろうが、良い部分だけではなく、悪い部分や嫌な柵や利害関係もそれには伴ってくる。素直に作品を作る妨げになることもある。

憧れ「私淑」できる先輩の作品が見いだせればいいなど主体展でも思ってきた。第54回主体展の企画展示「私の大切な作品」は現会員が所有する物故会員の作品を集めたものでした。何らかのつながりで手にすることになった先輩作家の作品、先輩がなくなり遺作となった。そんな作品が一部屋に集められた。

時間のずれはあるものの愛され刺激された記憶は今新しい。海道園夫さんは主体美術の第1回陳列目録第1室1番目に名前がある。たまたまの偶然である。仕事のことなどで長く主体展から離れていたが平成に入りまた出品を再開し遅くに会員となつた人。沢山の自画像など素描の積み重ねの末がタブローとなつた。加藤一さんはスペインバルセロナと東京の2か所を拠点に制作した。街と人をスケッチし続けた。主体の画集には二つの住所がいつも載っていた。素描、水彩、油彩、いろいろな作品が並ぶ。造形の良さが見て取れる。寺田政明さん、吉井忠さん、大村連さん、名前の後にさんを付け声をかけながら、面識のある人にもない人にも、いい距離を保つて近すぎもしない遠すぎもしない先輩の作品を楽しむ。

色々な人にそれぞれの好き嫌いがある。誰かの「私淑」に足る造形作品が、明治大正昭和成に次ぐ主体展に展示されるのを楽しみに。憧れの連鎖は古びていかない筈である。

2019.2 No.104

CONTENTS

- 1p 卷頭言 中嶋 修
2p 第54回主体展審査について 結城 智子
3p 第54回主体展陳列について 岩見 健二
第54回主体展研究部報告 井上 樹里
4p 巡回展報告(神戸) 森 慎司
将来構想委員会 経過報告 返町 勝治
5p 第55回記念主体展 企画展示 返町 勝治
6・7p 第54回主体展 研究講演会報告
石内 都氏 講演
「不在の身体・存在する衣・今」 榎本 香菜子
8p 新会員紹介・入賞者
ART WAVE
9p ●アトリエ訪問
12月の雪の日
工藤悦子さんのアトリエで 前川 アキ
10p ●各地の美術展から
グエン・ディン・ダン出版イベント 藤田 俊哉
●フォトエッセイ
栗崎 進一
11p ●「私と主体美術」
箱崎 利美(京都府)
武藏 義弘(千葉県)
山田加代子(群馬県)
12p インフォメーション
展覧会記録
2019年第55回主体展日程
編集後記・その他

第54回主体展報告



第54回主体展審査について

8月22日から25日にかけて「第54回主体展」の搬入、審査が行われた。搬入初日には、会員の作品とともに全国各地から多くの出品作品が東京都美術館地下3階に運び込まれた。受付やデータ入力を担当する会員達は大忙である。毎年この時期になると制作に明け暮れていた日々が一変する。展覧会委員は、会員作品を簡易撮影し陳列作業に備える。この日撮影した作品のデータをもとに会場の縮尺図を作成する。この地道な作業が会場効果を探りながら見応えのある主体展を演出する重要なプロセスになる。翌23日から80余名の会員が全国から参集して3日間の審査が行われた。

第54回展は返町事務所から引き継いだ初の女性責任者の福田玲子事務所による最初の主体展である。福田さんの明朗な声が審査会場に響き渡り、和やかな雰囲気のもと審査がスタートした。階段状に設えた座席に目をやると、初めて審査に参加した新会員の緊張した面持ちが新鮮である。

主体展では、創立会員も新会員も別け隔てなく対等に発言し、審査する。階級や序列に縛られる公募団体が多い中で主体の空気は頗る良い。柵なく自由に制作し、審査できる主体の主体たる一貫した姿勢を誇りに思う。

第54回展の審査は、総括するならとても厳正に丁寧に平穡に進行した。年齢も経験も画風も違う会員達が単に自分の価値観や好き嫌いで審査に臨むのではなく、対象作品の長所や可能性をまず発見することに徹する。技術的に優れ、作者の意図が分かりやすい一見して上手な作品もあれば、未熟だったり、何を描いているのかよくわからない作品もある。それでも何か気になる魅力やインパクトがあれば発言し、じっくり意見交換をする。長

事務局展覧会部 結城 智子

らく出品している方々の作品の場合は、少しの変化にも敏感に反応する会員の声で見方が変わることがよくある。だから簡単に多数決で結論を出すのではなく、一点一点丁寧に作品を見ることが何より大切である。不器用で粗削りな原石のような作品が主体展で磨かれて光輝くことを心から願っている。但し、過剰にポジティブな審査は気をつけないと諸刃の剣になる。最近の審査がとても平穡で揉めなくなったのは、寛容になり過ぎて厳しい意見や独善的な意見が減ってしまった事に起因するのではないか。易しくなり過ぎることを私は危惧している。傲慢な言い方で申し訳ないが主体展の壁に相応しいかどうか、会員には判断する使命があると思う。

新人部門の効果で、数年前から若い出品者が増えている。今回も中学生、高校生、大学生が力作を出品してくれた。未来の主体展の担い手になる大切な人材である。彼らが主体展を発表の場として飛躍できるように、現会員が誠心誠意研鑽を積み、主体展を盛り上げていくことが必須である。昨年発足した将来構想委員会も若者世代に向けてSNSの活用など社会情勢を踏まえたアプローチを模索している。また会則が改定され、地方展から人材の裾野を広げる試みも開始した。高齢化、少子化の厳しい現実に決して屈しない主体美術の姿勢は頼もしい。

第54回主体展の審査において入選者145名(内初入選24名)、佳作作家21名、秀作作家12名、新人賞1名が決定した。そして8月31日に新会員投票が行われ、夕方の総会にて7名の新会員が承認された。

(2018年12月)

第54回主体展陳列について

展覧会委員 岩見 健二

総会で選出された展覧会委員が、54回展展示方針を検討し以下のような具体案をまとめた。

- この数年続けてきた「緩やかな傾向別展示」を本年も踏襲。
- 本年の特色として、新鮮な可能性を前面に打ち出すという発想から第1室に若手作家、第6室に会員歴の浅い作家の作品を展示。
- 11室12室間のパネルをはずし、受賞作家・新人の作品をまとめて展示。
- 特別展示室は「私の大切な作品」として会員所蔵の主体物故作家の作品を展示。

具体的には、1室～9室…会員作品、10室～15室…出品者入選作品。

うち会員作品については、1室…若手会員作品と規格外作品、2室～4室…具象作品、5室…混合作品、創立会員作品、6室…会員歴の浅い作家の作品と規格外作品、7室…混合作品、8室～9室…抽象作品。そして特別展示室には、前述の作品35点を展示。

8月24日、以上の決定事項を踏まえてモチーフ・色調・大きさ・会場効果等を考慮しながら会場図に同縮尺の作品写真を配置。また昨年の記録を参考し各自の作品が昨年と同じ部屋に配置されないように配慮した。

8月31日、原案により仮配置されたレイアウトを第1室から確認。実測でしか判明しえなかつた作品間隔・スペース等の諸要素を再度詳細に点検し作品の配置換えを行った。与えられた時間ギリギリまで検討に時間を要し出品者入選作品の陳列の微調整も行った為、その陳列を早くから検討して頂いていた係会員の皆様にお手数をおかけした。

特別展示室は、先輩物故作家の小品・デッサンから大作とはまた違った創作への厳しい姿勢がひしひしと伝わり、その作品を所有したいと思った所蔵会員の感動までも感じられ大変意義ある空間になったと思っている。

また、11室を広くし新人及び秀作作家をまとめた事により、「出品者の作品の質が高くなった」との評価も多くいただけたようだ。一方で、1室と6室は傾向的にまとまりがなかったとの声もきかれたようである。

継続性と新鮮さ、調和とコントラスト等、毎年難しい問題を孕んでの作業ではある。しかし、作家個々の作品に込められたメッセージをより効果的に鑑賞者に伝えるという重要なコンセプトと共に、その集合から発する「主体」の精神及び姿勢を如何に的確にアピールするか。この二点が展覧会委員に託された使命であるということは今後も変わらないと思う。来年の主体展が楽しみである。

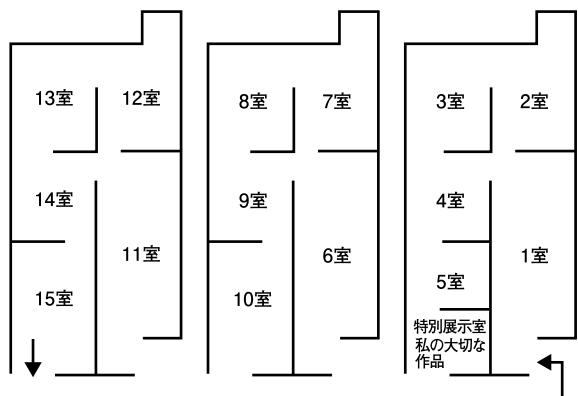
(2018年12月)



1室



6室



アーティストトーク 9月1日(土)



アーティストトーク 9月9日(日)



会場研究会

第54回主体展 研究部報告

(2018年12月)

研究部 井上 樹里

■研究講演会

石内都氏「不在の身体・存在する衣・今」9/2(日)14時から都美館講堂にて開催致しました。参加者は約200名。(詳細報告は6～7ページをご覧ください)

■アーティストトーク

5年目を迎えたアーティストトークは主体美術に関わる人々の魅力を伝えながら展覧会鑑賞の導入になるような内容となり、終始和やかで参加者の笑い声が響くイベントとなりました。

初回は9/1(土)14時より関東圏外在住会員を中心に伊藤博昭、オノ・ミチ・ヒロ、種倉紀昭、前川アキ、以上4会員にご協力いただきました。

第2回は9/9(日)14時より関東近辺在住会員を中心に小菅光夫、新島知夏、原田文子、以上3会員にご協力いただきました。(氏名記載は五十音順)

■会場研究会

アーティストトーク終了後、両日共に有志会員と来場された出品者によるフリートーク形式での会場研究会を実施致しました。

ご参加、ご協力くださった全ての皆様へこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

巡回展報告

神戸展

事務局 森 優司

神戸巡回展は9月21日から24日の4日間の会期として、昨年に引き続き原田の森ギャラリーの2フロアを使用しての開催となりました。会期が昨年より一日短くなり公募展の巡回としても短く、閉会後見逃してしまったという声もいただいたのが残念ではありますたが、会員諸氏と出品者の協力の下盛況のうちに終了しました。

美術館の場所・入り口・会場・閉場時間・順路など東京都美術館とは会場配置が違い展示方法も変わりました。エントランスの1階より2階会場のほうが面積も広いためメイン会場と位置づけ、本展とほぼ同様に並べ、1階に規格外を中心とする大作と受賞作家・出品者を展示了しました。規格外作品を除き東京都美術館の展示とほぼ同様で、搬入展示もしやすくわかりやすい上に作品も見やすくなりよかったですと考えています。多少の不都合も、二年目に入り工夫のしどころがわかつてくると却って好都合なこと(会場配置やエントランスの導線など)も見つかります。いずれにせよリニューアルオープンしたての二年間を続けて使用出来ていることは幸運なことだと思います。

しかし同時に会計的には大変厳しい状況が続いている。入場料を有料にするか無料にするかで会場使用料が違いますが、街の人の流れと美術館の立地が連動しておらず、自然な入館者の入場料は有料の場合の会場使用料との差額を越えないと見積もって、今回展も入場無料としました。したがってほとんどの収入は巡回展関係者の分担金で賄わねばならず、負担過多と共にそれでも追いつかずに赤字が累積していることが現在一番の問題となっています。

今年は例年より出品者が減ったことで一人一人にかかる分担金の負担が重く、この低減が来年5回展にむけての大きな課題となります。同時に会期が短くなったことにより来場者数が限られ、主体美術を広く知りたいという目的の一つに未達成感があり残念でした。しかし今回展もその短い会期の中、遠方からの来場もあり、この



神戸展
会場風景



場をお借りして謝意を述べたいと思います。ありがとうございました。

京都市美術館は2020年の開館を目指して改修工事中であり、館内の見学会が行われ、館内中央の通称大陳列室を中心とした工事の様子がテレビ中継されていました。同時にリニューアル後の利用規定概要も公表され、以前より会場使用料もあがっているとはいえた想定の範囲内に留まるものです。京都岡崎公園は人の往来も多く自然入館者の入場料などによる収入も期待できることから、現在より様々な意味合いで好転するのではないかと多少安堵しています。現在のところは平成31年度中にリニューアルオープンの予定とアナウンスされていますが、会場貸しを始めるのがいつからになるかは不確定です。今後とも開館や使用申し込みのタイミングを注視していきたいと思っています。

(2018年12月)

将来構想委員会 経過報告

将来構想委員会 叴町 勝治

2017年第53回主体展の総会で「将来構想委員会」が発足しました。急速に少子高齢化が進む社会情勢の中で会員、応募者を増やし、主体展を継続的に維持し発展させ、積極的な目標を持った「達成型集団」として、日本の美術シーンを牽引する魅力ある集団となるための長期的な方策をさぐる事を目的にしています。

2006年から2年間活動した同名の会議を10年ぶりに再開した形で、メンバーの選考については前回を踏襲し、過去の事務局責任者・現責任者及び会計者・巡回展責任者・投票による5名(同票があり6名に)ということでおこなうとしました。

■メンバー

浅野 修、岩見健二、榎本香菜子、加藤嘉巳、齋藤典久、返町勝治、續橋守、長沢晋一、中嶋 修、中城芳裕、中村輝行、福田玲子、藤田俊哉、藤本 卓、森 優司、矢野利隆、山本靖久、結城智子、渡邊俊行

2017年12月10日に第1回目の会議を開き、前回の委員会で決められた基本理念を検討し、これを踏襲していく事を確認しました。

■基本理念

- ①「野性」「人間性」「社会性」を基盤に置いてきた創作姿勢を再確認し、主体の独自性として継続、発展させていく。
- ②厳正な審査を目指す。
- ③可能性豊かな新人の発掘、育成を目指す。
- ④展示フロアにおいて斬新な企画を発信する。

以後2018年7月22日迄に4回の会議を開き、第54回展総会では5項目の提案をおこない承認されました。

1. 広報の新たな展開案をさぐる。

- SNS(ライン、フェイスブック、ツイッター、インスタグラム)の活用について、その効果と具体的な方法、問題点などの検討を進める。
- ホームページの情報を増やす。審査、展示の画像や地域展の情報など。

2. 地域展の活性化を図り参加者の裾野を広げる。

- 地域展への参加資格を見直し、内規を改定する。従来のものに「本協会会員2名以上の推薦のある者」を加える。
- 地域展の企画に要請があれば協力する。講演、シンポジウム、ワークショップ、合同展示等。

3. 入会金の是正

会則を改定し、新会員の入会金12万円を8万円に是正する。

4. 本展に於いて企画展示を継続しておこなう。

5. 応募作品について、作品主義であり作品の大きさや作者の年齢に制限がないことを改めて明確に発信する。

今後については、既に各委員から提言され、大きく「組織と運営 現状の問題点と改善方法」「将来を展望した取り組みに関して」に振り分けている各種項目の検討を進め、更に新たなアイデアがあれば取り入れて整理し、順次総会に提案していきたいと考えています。

「寺田政明 没後30年・吉井 忠 没後20年」

第55回記念主体展では1964年の主体美術協会創立時より終生当会の中心作家として活躍された画家お二人の企画展示を行います。

寺田氏は福岡県八幡市、吉井氏は福島県福島市に生まれますが、共に10代で上京し昭和4年(1929)太平洋画会研究所で出会います。昭和10年頃からの血氣盛んな20代から30代にかけては豊島区の貸しアトリエが建ち並ぶ通称「池袋モンパルナス」に住み、多くの画家仲間達との交流の中で制作活動を展開します。

60年に及ぶ深い交友関係の中でお互いに切磋琢磨しながら、自己の目指す造形に真摯に向き合い、ヒューマニズムを根底に激しい情熱で対象物を凝視したお二人の作品に出会える貴重な機会となることと思います。

返町 勝治

寺田政明

Terada Masaaki
1912年～1989年



- 1912年 福岡県八幡市に生まれる。
- 1927年 九州画学院入学。
- 1928年 上京し小林萬吾主催の同舟舎絵画研究所に学ぶ。
- 1930年 太平洋美術学校本科に入学。吉井忠、鶴岡政男、松本俊介、麻生三郎らを知る。
- 1932年 「第2回独立美術協会展」に「風景B」が初入選。
- 1933年 豊島区長崎仲町 通称<池袋モンパルナス>へ転居。
鶴岡政男らが結成した「NOVA展」に出品。
- 1936年 麻生三郎・吉井忠らと「エコール・ド・東京」を結成。また「アヴァン・ガルド芸術家クラブ」にも参加。
- 1937年 「第7回独立美術協会展」にて独立美術協会賞。
- 1938年 北脇昇、糸園和三郎、吉井忠、古沢岩美らと「創紀美術協会」創立。
- 1939年 「創紀美術協会」解散。福沢一郎、斎藤義重、吉井忠、北脇昇らと「美術文化協会」を結成。
- 1943年 豊光、井上長三郎、大野五郎、鶴岡政男らと「新人画会」を結成
- 1947年 板橋区前野町 <通称ひぐらし谷>へ転居。
- 1949年 「自由美術家協会展」に参加し会員となる。「日本美術家連盟」創立委員。
- 1964年 「自由美術家協会」を退会し「主体美術協会」を結成。
- 1966年 北九州市立八幡美術館にて「寺田政明白選展」を開催。
- 1979年 板橋区立美術館で「寺田政明回顧展」を開催。
- 1981年 北九州市立美術館にて「寺田政明展」を開催。
- 1985年 「安井賞展」選考委員となる。
- 1989年 逝去。享年77歳。



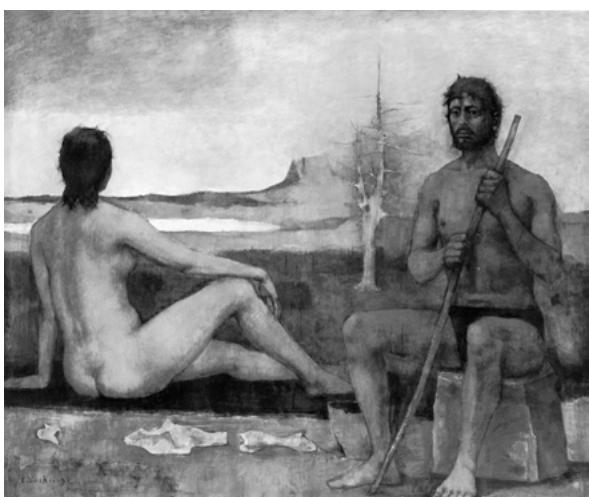
「冬の佐渡(外海府)」(91.5×182.5cm)1982年

吉井 忠

Yoshii Tadashi
1908年～1999年



- 1908年 福島市に生れる。
- 1926年 上京し太平洋美術学校に学ぶ。
- 1928年 「第9回帝展」に「祠」が初入選。
- 1932年 「太平洋画会展」で中村彝賞受賞。
- 1936年 麻生三郎、寺田政明らと「エコール・ド・東京」を結成。 渡仏。
- 1937年 豊島区長崎町 通称<池袋モンパルナス>に住む。
- 1938年 糸園和三郎・寺田政明・北脇昇、古沢岩美らと「創紀美術協会」を結成。
- 1939年 福沢一郎、斎藤義重、寺田政明、北脇昇らと「美術文化協会」を結成。
- 1941年 斎藤長三、福田豊四郎らと「東北生活美術協会」を結成。
- 1946年 「日本美術会」創立に参加。
- 1947年 「自由美術家協会」に参加。「第1回アンデパンダン展」に参加。
「美術文化協会」を退会し、井上長三郎、丸木位里らと「前衛美術会」を結成。
- 1964年 「自由美術家協会」を退会し「主体美術協会」を結成。
- 1965～86年にかけて中国・シルクロード・メキシコ・キューバ等旅行。
- 1975年 福島県文化会館で回顧展。
- 1989年 「安井賞展」選考委員となる。
- 1992年 福島県立美術館にて回顧展。
- 1999年 逝去。享年91歳。



「曠野の人」(F130)1981年

石内 都氏 講演

「不在の身体・存在する衣・今」

2018年は長く暑い夏だった。講演会当日は幸いなことに過ごしやすい1日となり、初期からの写真をスクリーンに映し出しながら1時間、講演をしていただいた。ご多忙な石内都さんに何故お願ひしたか、それは異業種であっても主体美術と繋がるものがあるという確信であり、専門分野にだけ浸かっているといずれは仕事が枯れてくるという、あらゆる分野の作家が語る言葉に大いに同調するからでもある。紙面の関係で残念ながら十分とはいえないが、講演会当日の言葉を引用しつつ、少しでもわかりやすくお伝えできたら、と思う。

©Maki Ishii



「Beginning 1975」



石内都さんは、高校生の時に東京オリンピックのポスター（亀倉雄策）を見て、これからはデザイナーになるしかないと多摩美のデザイン科に入学。体質に合わせず、2年目で織物に移るも上手くいかず挫折。1975年頃から独学で写真を撮り始める。友人からネガが濃ければ、時間さえあれば画像が出てくると教えられ、その結果として、粒子の荒いモノクロ写真は石内作品の特徴にもなっている。最初の個展は1977年『YOKOSUKA STORY』。日本題は『絶唱、横須賀ストーリー』（山口百恵の『横須賀ストーリー』がヒットしていた）。横須賀の地図を買って、印をつけながら半年間撮り続けた。横須賀から受けたキズみたいなものを表に吐き出すひとつのプロセスとして写真が合っていたという。

ない通りがあったのですね。どぶ板通りっていうのですが、子どもの心に何で歩いちやいけないのかわからない。教えてくれない。それがどういうことかというと私の女性性なわけです。基地のありかたと自分の女性性というのを横須賀の街が教えてくれました。

高校時代ベトナム戦争があって、横須賀の街は本当にすんでいて、兵隊さんが死に行く感じがすごくあったのです。歩いていても怖い思いをしたことがいっぱいあって、ドブ板通りはカメラを持った時に初めて行ったのです。実はカメラというものは一種の武器なんですね。カメラを持っていると何となく怖くない、でも教育されたものっていうのはなかなか抜けきれなくて、やはり写真は撮れませんでした。何度も行つた時にやっと撮れました。」

「アパートメント」



「アパートを撮っていてアパートじゃないのです。時間がたまっている感じ。人の忘れ物。体臭とか匂いとか、時間とか音とか、目に見えないものを写真って撮れるんじゃないかな、と勝手に思つて撮っていたシリーズです。

ところが、なんと木村伊兵衛賞をいただいたのですね。私自身は撮影の仕事をするっていう気がなくて、自分のために写真を撮ればいいって考えていました。しかし、女性で初めてということで話題となり仕事が山のようにきました。私は撮影が苦手なの（笑い）。変な

話ですけど暗室で写真を焼くのは大好き。だけど撮影はしたくない。木村伊兵衛賞をいただいた年の1年は仕事をしたんですよ。でも面白くない。その結果として、頼まれた写真を撮るのは止めました。私は25年間仕事をしていません。でも、写真は自分のためにしかやらないぞと決めた結果、今があるのかな、みたいな感じがあります。」

「1・9・4・7」



「私が生まれた年をタイトルにしたシリーズです。高校の同級生、同じマンションの人、私が生れた群馬県の1947年生れの女性の手と足を撮りました。身体の一番過酷な手と足に40年の時間がたまっているのではないか、と思ったのです。多分、自分の足の裏なんか見ませんよね。まして他人の足の裏を見るってことは無いわけです。一見、しわとかシミとかたことが汚く見えるけど私はすっこいきれいだと思って、これは時間の形だなと思って撮ったのです。ですから、一種、自写像ですね。自分自身を撮っているんです。」

個人というのは本当にちっぽけな、なんてことのないたった一人の個人でしかない。でも50人の女を撮った時にもしかしたら、初めて会った見知らぬ女たちの、私は一人かもしれない。

基本的に主婦が多かったのですね。一番、私が仲が悪いのは主婦だったのです（笑い）。でも、この時に80%主婦を撮ったのですけれど、彼女たちは私が来るの待つてくれていた感じがあって受け入れてくれたのです。その時に40過ぎて肩の力がふっと抜けたんですよ。今まで私は写真界にも女があまりいないということもあって本当に頑張って突っ張っていたんですね。そういうツッパリも含めて、どうか何てことないんだ、主婦だろうが写真家だろうが変わらないな、と思ったのがこのシリーズです。」

「絶唱、横須賀ストーリー」



「暗室に入るのがすごく好きで、いったい何を撮つたらいいか考えた結果として、6歳から19歳まで住んでいた横須賀を撮りました。基地の街というのを初めて見た時に、光り輝いているけれどもなんか怖い、女の子は絶対歩いてはいけ

「マザーズ」



『マザーズ』は母親の遺品シリーズ。あまり密ではなかった母娘が少しづつ会話ができるようになっていった矢先、亡くなった。タンスに残された沢山の下着。遺品と対話しつつ撮られた写真は多くの人の心をつかみ、このシリーズによりベネチア・ビエンナーレ日本代表となる。

「モノクロで口紅を撮ったら薄汚くて、なんか口紅は赤くないとだめだ、と思ってこのシリーズからカラーに変わります。自然にカラーにしたというのは母のおかげだなという気がして、ベネチアも多分母が連れて行ってくれたのではないかなど今さらながら本当に母に感謝しています。」

「ひろしま」



ベネチア・ビエンナーレ凱旋展、写真美術館で展示中、出版社から広島を撮りませんか、という話があり1週間悩んだ末に広島に向かった。

「実は広島というのはあらゆる写真家が撮っているし、あらゆる表現がなされているわけですね。そこで私は撮る物がないと思っていたのです。資料館に行って遺品に出会ったら仰天した。色が残っている、模様がある、すぐくされいで恰好がいい。私が知っている広島の遺品とは全部モノクロで、くすんでいて硬くて、全然印象が違ったのです。広島の遺品たちは73年たっているのですが、まだ新しく入るのです。それを知った時にはショックを受けました。戦後って終わっていないのです。一つと永遠と続いているんですよ。」

遺品たちは私たちが死んでもまだある。収蔵庫は湿気も温度管理もされていて彼女たちはず一つずつと資料として残らないといけない。それも可哀そうだな、みたいな気持ちもあって私は遺品を撮っていて資料を撮っているわけではありません。遺品だけでも私が生きている同じ時間と同じ空間に出会ったモノです。

資料館は地下にあるのですが、明るい陽射しの中でトレーシングペーパーを敷いて、ワンピースが一番恰好よくなる形を作ります。本当に資料館では小さく折りたたんであるんですよ。それを明るい太陽の光が入るところに持って行って広げて挨拶して撮っています。これを着ていた女の子が誰だかわからないけれども、その子に出会ってる感じがしています。まだまだ続いている戦後、福島でも震災で原発事故があり何も解決していないくて、ずっとずっと日本はどこまでこのまま続していくのかなって思いながら撮っています。」

「フリーダ・カーロ」



ベネチア・ビエンナーレで『マザーズ』を見たメキシコのフリーダ・カーロ美術館の学芸員の依頼で3週間、フリーダの遺品を撮影する。現地で初めて見たフリーダの原画の優しさ、タッチの柔らかさに驚き感動を受ける。『青い家』での撮影は、遺品の記録ではなくフリーダが傷みと闘いつつも誇り高く生き抜いた女性であり、画家だった(逆ではない)ことから、敬意と愛が深く刻まれた写真に結実している。

「フリーダは6歳で小児麻痺ですね。18歳で交通事故、満身創痍なんです。絵は小さいの。なぜか、ベッドの上で描いているからです。ベッドの天蓋に鏡がかけてあって、自画像は鏡を見ながら描いている。彼女は履いたかどうかわからいませんが死ぬ間際に義足も作っています。写真を撮られる時には10本の指に指輪している。きちとお洒落しているのです。写真で残るから。フリーダってすごい女だなと思ったのは、痛みと闘ったのですよ、ずっと。それと差別とも。男とのスキンシップもいっぱいあるけど、そ

んなことどうでもいいの。男は彼女にとって情報仕入れる為に、とても必要だったと思う。」

彼女は10個位コルセット持っています。多分これは生きる術だったと思う。コルセットによって身体を固定することで保っていたんだなとすごくわかるのです。最後の死に方がカッコいいですよ。彼女は火葬してくれって言ったの。ずっと横になっていたから死んでも横になりたくないって。それを読んだ時、私涙が出ちゃって。日常の傷みというのが彼女の家に行ってよくわかったんですけど、それでも絵を描くということの希望があったの。絵を描く、というのは未来なの。彼女は未来を信じていたんだなってことが絵を見てわかったのです。だからフリーダに会えて私も未来を信じることができたような感じがとてもしています。」

「life展—ひろしま」

被爆した孤児の文章に絵を描いたちひろの原画と『ひろしま』遺品の写真によるコラボレーション。

※最後に2012年私家判 フリーダ・カーロ遺品撮影ドキュメント15分上映



「このあいだまでやっていた安曇野ちひろ美術館での『ひろしま』です。ちひろは広島に行くと旅館で戻の上に寝ているみたいで資料館にも入れないような人だったのです。絵なんか描いちやいけないのでないかというよそ者意識を持っていた人です。私はよそ者だから撮れた、という逆のタイプで、とても良い展覧会になりました。」

11月に東京のちひろ美術館で、ちひろの遺品を撮り下ろし、「マザーズ」の遺品と共に展示します。ぜひ見に来てください。」

講演を終えて

研究部 榎本香菜子

2008年、芥川喜好氏の講演「創造の自由について」は、世俗の画壇を拒否し、本当に伝わる絵とは何か、人間の自由とはどういうことなのかをストレートに投げかけ、昨年の野見山暁治氏は「絵の約束事なんか関係ない、俺のぶつけたいもの描くんだ」と目覚めた熱き時代の画家魂を語って下さった。石内都さんの講演も又その流れにあった。師を持たず'70年代からずっと撮りたいものだけを撮り、その結果として仕事が仕事を呼び現在に至る。「目の前にある世界をしっかりと見つけ、慈しみ、愛でる心の持ち主が、写真を撮る人である」この言葉に出あった時、私は少なからず衝撃を受け合点したのだ。フリーダ遺品を撮影しているドキュメントの中でスカートのひだを形よく整え撮影するシーンがあった。“広島の遺品たちに挨拶して撮っています”という講演での言葉が重なり胸がとても熱くなった。アパートメントも手や足の裏も、遺品も全て目の前のモノを撮っているのではなく時間だとおしゃった。ゆえに、私達はどの写真においても、その開かれた世界に分け入り、そこに本質的なもの、真実を見出だすのだ。

主体美術を築いた先輩たちの作品の根底には常に社会を厳しく見つめる眼と人間への深い愛、とりわけ市井の人々への優しい眼差しがあった。石内都さんの講演の端々にも、同じく共感する力の深さ、繊細さ、鋭さを感じた。勿論それだけではない。ご活躍なさっている裏には、計り知れない仕事への厳しい姿勢があるものと思う。“肝がすわっている”とは失礼な形容かもしれないが、堂々とした風貌は一夜にして築かれたものではなく、暗室という闇と沈黙の中で自己と世界とに対峙し闘ってきた長い時間がつくりあげた結果なのだと実感した。

こちらの思いだけで強引にお願いしてしまった講演会、ご多忙中にも関わらずお引き受けいただき感謝の念に堪えない。

今年は2カ所で写真展があるので、ぜひ生の写真を見ていただきたい。

■奈良市写真美術館

2019年6月22日～9月1日「布の来歴」

■ちひろ美術館・東京

2019年11月1日～2020年1月31日(タイトル未定)

2018 NEW MEMBER 新会員紹介

※新会員の最新作品は第54回展の図録、またはホームページでご覧ください。

上野 信彦

Nobuhiko Ueno



■生年月日

1968年1月9日

■出身地 佐賀県

■制作に使う主な素材

アクリル絵具、油絵具

大西 佐頼

Sayori Onishi



■生年月日

1980年6月17日

■出身地 千葉県

■制作に使う主な素材

油絵具

北村 奈美

Nami Kitamura



■生年月日

1978年

■出身地 石川県

■制作に使う主な素材

キャンバス・アクリル絵具・その他

長崎 羊子

Yoko Nagasaki



■出身地

横浜市

■制作に使う主な素材

油絵具

福田 和幸

Kazuyuki Fukuda



■生年月日

1976年6月30日

■出身地 千葉県

■制作に使う主な素材

アクリル、油彩

細矢恵美子

Emiko Hosoya



■生年月日

1947年9月21日

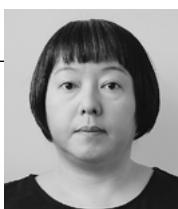
■出身地 神奈川県

■制作に使う主な素材

油彩

前山 陽子

Yoko Maeyama



■生年月日

1972年4月28日

■出身地 東京都

■制作に使う主な素材

アクリル絵具

■自作について

私は高校生の頃、絵画の「これまでこの世に無かった世界や美」を表現出来る魅力に惹かれ、絵を描き始めました。現在は、風景画を中心に描いていますが、この2~3年は「本来、そこにあるべきものが欠けている」風景(例えば、人がいるはずの街角に自転車だけが停めてある風景)をモチーフに描いています。今後も、普通のモチーフでありながらも、私の感情の入った絵を描いていきたいと思います。

■自作について

きわめて個人的な理由で、絵がないとやっていられないし、やっていられないから絵を描いています。物心ついた頃に祖父が若くして亡くなり、心の中が生きることと死ぬことについて素朴な疑問で一杯になりました。形を変えながらもそれがずっと居座っていて、描く行為によって救われたり打ちのめされたりしています。言葉にならないものに向かって、絵でしか表現できないものをこれからも追いかけていきたいと思います。

■自作について

平成が終わろうとしている。この30年、私は多くの時間を絵と共に過ごしてきた。世の中は、平成の名とは裏腹に不安感の方が強かったように思う。そんな時だからこそ、私は鑑賞者がポジティブな気持ちになれる作品を描きたいと思い制作している。私は日々目にする風景や自然に感動したりエネルギーを感じたりする。そんな目に見えないものを絵として表現したいと思っている。特別ではなく平凡で健康的な私だからこそ描ける、鑑賞者の心を動かす作品をこれからも生み出していきたい。

■自作について

私の絵、何を描きたいかと問われると、いつも言葉に出来ず、曖昧な自分が出ます。初めに構想も何もなく、キャンバスに向かってしまいます。想像力も技も無く、足掻いた挙句の偶然の色、形が愛おしく宝物になっていきます。細々と小さな宝物を集めたり、壊して壊したら、もっと自分の見たかった物が現れるのではとも。自分の絵は始まったばかり、やりたい事がいっぱいです。どうぞ宜しくお願い致します。

■自作について

僕は幼少の頃から絵画制作が好きで、よく新聞の折り込みチラシなどの裏に絵を描いていました。僕にとって芸術とは生活と共に人生と同時にあるものです。それ故、絵画制作は一様では有りません。描ける時期描けない時期は勿論、テーマに至っても此れだけを追い詰めると言う事は出来ません。やはり人生で起った出来事、感情などがテーマを替えてきました。良く言えば発展し続けていたり、たまに後退、ほとんど停滞あります。少し前までは沖縄の光、そこで見つけたアグー豚になり、今はモノクロの豚をテーマにしています。白黒の減り張りがマイブームです。今後はモノクロの豚を気がすむまで突き詰めたら、カラーにも戻りたいですし、沖縄の文化や風景もまだまだ描きたいと思っています。

■自作について

牛乳パックのパレットに無造作に広がる筆跡を追うかのように描き出します。崩す、消す、壊す、くり返す… それを、どこで止めたらいいのか… 何を描きたいのか?なぜ描くのか? 絵を描いていると、どうしようもない自分にぶつかる。固いしこりのような自分に気づく…。描いて描いて… ぐるぐるまわって、いつかストーンとそのうずの中に落ちるものがあるという。信じよう。『くり返し、くり返すこと。そこにはあらわれてくるものに、ささえられ…消えていくものにいらだって…』(ある詩人より)

■自作について

絵のモデルになってくれた鳥たちを紹介します。福島県の阿武隈川で冬を越す白鳥。上野動物園の檻の中で暮らすベニイロフラミンゴ。青いコートを着たフラミンゴは、10年ほど前、地獄めぐりをした時に出会いました。地獄といっても九州の有名な温泉地なので、私には極楽です。それから、隅田川のユリカモメ。毎年木枯らしに乗って次々と現れて、5階の仕事場の窓と同じ高さを飛び回ります。急げている私を空からじっと見ていています。

アトリエ訪問 vol.3

12月の雪の日、工藤悦子さんのアトリエで。



▲アトリエで想いを巡らす工藤さん



▲オーディオセット。異国のリズムで作業も捲る?
◀アトリエの本棚。本は1階にも山ほど

■広くて明るいアトリエと大容量の保管庫

ドアを開けると、ふんと油のよい香りに落ちていた気持ちに。窓が3つもある、とても明るいアトリエです。壁には大きな作品、床には鮮やかなオレンジ色の下塗りがされた小さなキャンバスがきれいに並んでいます。150号からの大作が大量に収納できる保管庫があるので、アトリエ内はとてもすっきり広々としていて、一つひとつの作品をじっくりと見渡すことができます。遅い初雪で真っ白になった公園を望む南向きの窓から冬の低い日差しが静かにそぞぎ、ゆったりした時間が流れます。

■ユニークな旅の音楽集

床に座って作業をする机の上には、クロッキーブックや筆記用具が作業の続きを待つかのように置かれ、その横にはCDが3枚入る便利なオーディオセットがあります。

工藤さんは制作に入る時は無音で集中するので、音楽はもっぱら下地づくりや掃除などの作業中に聴くのだそう。昔から大好きというシャンソンの他、クラシックから歌謡曲も少しと、様々なジャンルのCDが積まれています。言葉の通じないユニークな方がいいの。というエジプト、トルコ、ポルトガル、スペインの楽曲CDは、ご退職後の旅行で現地のガイドさんにオススメを尋ねて購入したもので、曲を聴くとその時の情景が浮かぶから。確かに、色褪せないステキなお土産です。

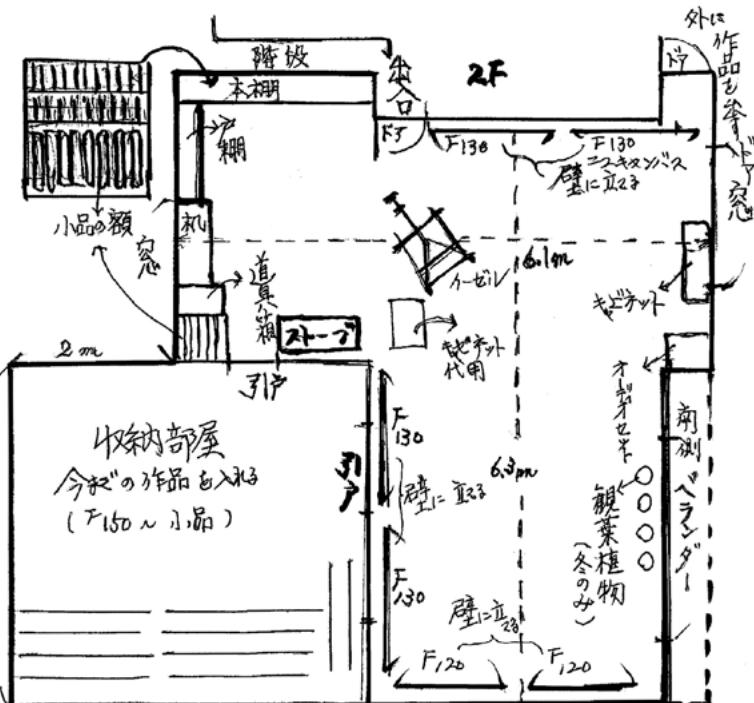
■どんどん増えた元気な観葉植物

夏はベランダに出しているという、窓辺に並ぶ大ぶりの鉢植えからすくすく伸びる観葉植物は、1階のリビングや和室にもたくさんあります。枯れ

取材・文／前川アキ

工藤悦子さんのアトリエは、北海道江別市の閑静な住宅街のご自宅2階にあります。工藤さんは10月に札幌市中心街のギャラリーで大きな個展を開催されたばかり。大盛況の会場ではお客様から、どこでどの様にして描いているの?との質問も多かったそうで、私も期待を胸に少し緊張しつつお訪ねしました。

■工藤悦子さん自筆のアトリエ図



ないでどんどん増えてるの。植物をいじっている時が一番楽しいの。とりづらよく葉を剪定しながら優しい表情で、植物をいつも枯らしてしまう私に水やりのコツなどを教えてくださいました。

■大切な本たちと想い出の作品

天井まで届く大きな本棚には、沢山の本がジャンルごとにきれいで整理されて詰め込まれています。本は工藤さんにとって「友達」と言います。幼少の頃から、ご両親が買ってくれた本といつも一緒でした。もしかしたら絵を描くより好きかも知れない。と笑う工藤さん。今も、就寝前に必ず本を読むそうです。

壁には初めて拝見する工藤さんの静物の水彩画が2点。対象に正面から向き合い、丁寧に筆を置いた画面は、まるで油絵のように重厚で、実直で真摯な思いが伝わってきます。働きながら時間を見つけては公民館の無料講座やデッサン会、クロッキー会に通って制作を続け、いつしか自分の表現を模索し始める前の、原点ともいえる作品です。

■命の光

アトリエでのひと時を端的にお伝えいたしましたが、ここに書ききれない程のたくさんのお話を伺い、そっと心に留めました。工藤さんご自身、そしてご家族の歴史。生き生きとした植物と作品を眺めながら、アトリエに命の光を感じました。江別市の珍しい無添加よもぎ餅と豆大福までいただいて、工藤さんの優しさでおなかいっぱい胸いっぱい。雪の中、とても温かい気持ちで帰路につきました。

各地の イベント から

グエン・ディン・ダン著「油絵の技術」 出版記念イベント開催

2018年9月25日ハノイにて

藤田 俊哉

グエン・ディン・ダンさんから本国ベトナムでの著書「油絵の技法」出版のニュースが届きました。9月初め主体展事務所にて、ご本人の解説付きで見せて頂いた本は、ベトナム語ゆえ読めないながら多数の図と写真が掲載された立派な技法書であり、油絵の歴史について主に技術面から体系的に解説した内容には、驚かされました。改めて彼は画家であると同時に優れた科学者、研究者であることを感じた次第です。

ここにハノイで開催された出版記念イベントの様子を簡単ながらお伝えします。



グエン・ディン・ダン「油絵の技術」
出版社: Dan Tri & 文化合同会社 Dong A
436ページ



インタビューを受けるグエンさん

【本の紹介文より(抜粋)】(英文の翻訳)

「油絵の技術」はグエン・ディン・ダンによる約40章の文章に基づいて構成されています。これはベトナムのアーティストによって書かれ、ベトナムで出版されたものの中で初の油絵の技術に関する本で、著者の知識と、40年以上にわたり油絵を試みた経験を要約した総合的な「教科書」です。

油絵を学ぶ生徒、アーティスト、美術の研究者や愛好家は、一般的または古典的な油絵の技術における、油絵の深い知識を発見するでしょう。例えば、フランドルの巨匠から現代の美術学校までの油絵の歴史…油絵の道具やそれらの特徴・安全性・保存のルールなど…著者自身だけでなく古典学派や古い時代の巨匠による絵の技法の徹底的な分析などです。

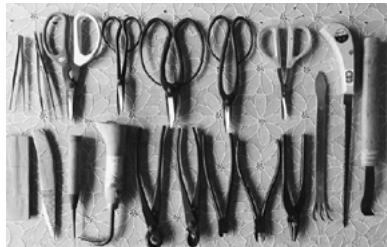
この本が約600年にわたって油絵の芸術に誇りをもたらしてきた古い時代の巨匠たちの様々なレベルの技法が、ベトナム人の読者たちに体系的に伝わる最初のものになることが私たちの願いです。

(翻訳／島本拓、藤田俊哉)

フォト・エッセイ

盆栽と共に45年

栗崎 進一



ある秋の朝、庭に面した座敷のカーテンを開くと、盆栽棚のモミジ数鉢の真っ赤な色が目に飛び込んできた。

昨日まではやや色が薄かったが、夜の冷え込みで一気に紅葉が進んだようだ。今年は特にきれいだ。他の雑木盆栽(ブナ、カエデ、ヒメシャラ、錦木、欅、コマユミ、イワシデ、カリン、百日紅等)の紅葉にも期待し、心がワクワクしてきた。

盆栽を始めたのは結婚後。暇つぶしに近くの山から採集した山モミジ、黒松の松力サから取り出した種を蒔いて、春に発芽したものを小鉢に入れ育成してきた。培養に興味が増し、春の植木市でも毎年いろんな雑木の小苗を買って種類を増やして来た。また雑木盆栽の育て方等の雑誌を数冊購入し、実生、挿木、接ぎ木、取り木等を行い、自己流で枝作りしながら育てて今年で45年になる。

以前一緒に仕事をした方が、平成19年春にご自宅で盆栽個展をすることを新聞にて知り、訪ねて行き観賞させていただいた。黒松、真拍盆栽が主であるが、雑木盆栽も展示されていて見事な個展であった。数時間盆栽に見惚れて、いろいろと管理及び手入れ方法等について話していると、日本盆栽協会熊本支部への加入を勧められたので、すぐに加入し、その後指導を受けながら盆栽を育てている。

盆栽もある程度大きくなつたものや樹形がほぼ出来ているものは高額で、サラリーマンには手が出ない。そのため、自分で実生、接ぎ木、取り木等の方法で育成してきた。今では黒松、もみじ、ブナ、欅、寒グミ等を、日本盆栽協会熊本支部展に出品展示が出来るようになった。盆栽展は毎年冬の時期が多く、特に雑木盆栽は裸木と言って葉が紅葉し落

ちた後の木を展示するので、根張り、枝ぶりなど盆栽全体のバランスが観賞の対象となる。

盆栽の手入れは樹種の種類や季節によつても違う。春は不要枝の剪定、植替、植替え1ヶ月後の肥料やり、夏は乾燥に注意し1日数回の水やりや伸びすぎる枝の剪定。秋は肥料、剪定、松等の古葉取り、針金による枝等の矯正。冬は盆栽展出品予定木の手入れや、鉢や盆栽をきれいにし殺虫剤散布、又寒さに弱い木は室内に取込等の作業がある。盆栽への病気対策として殺虫、殺菌剤等を定期的に散布する。

秋から翌年の春先までは各県内地域(熊本県内、宮崎県、又福岡県での日本盆栽青樹展)で盆栽展が実施されている。その中でも特に受賞した雑木盆栽の木の枝作り等を参考にしている。思いもよらない枝作りされている盆栽もあり、自分の盆栽を頭で思い浮かべながら展示を見学している。

雑木盆栽はそれぞれ季節によって変わっていく。春の新芽も様々で、新緑が美しく輝き、夏は深い緑、秋は木によっていろいろ違った紅葉、冬は紅葉が散つた裸木。これからまだまだ時間は掛かるが、樹木にあつた枝ぶりを作り、盆栽の樹格を高め、青樹展等に出品できるようにと思っている。

「私と主体美術」

主体展との出会いは何だったのか。またこの展覧会の魅力とは…?
これまで継続して出品を続けて来られた方に「私にとっての主体展」について、それぞれの思いを綴っていただきます。



箱崎 和美（京都府）

私は京都市民アトリエの新制作の桑田道夫先生の教室で勉強をしていましたが、先生が亡くなり教室には行かず、倉元さん（*京都市在住、主体展出品者）と二人展をしたりしていた折、人物画勉強会で主体の岡本氏に公募展の誘いを受けました。

「100号3枚、ヒエーッ、100号なんか描いたことあらへん」二人とも本音でした。今から思えば、倉元さんと二人だったのでチャレンジ出来たのだと思います。

第41回から出品して本年で14回目となりました。主体展に出品する事により交友関係も広がり、創作意欲も広がりました。私にとって創作することは、日常から非日常へ、想像の世界で一人遊びする時間です。何をしていても、どこか頭の片隅に絵の事が有ります。

キャンバスを前に悩みます。

キャンバスに絵の具をつける。

絵が始まる、様々な出会いと発見、右往左往、わからないわからない、とぶつくさ言いながらも、エーイ、絵なんかやめてしまえと、空しくも自分を慰めてみるけど、やめられないのが不思議です。

主体展に出品するたびに、新たな課題が生まれます。

それはまるで魅惑の階段を登っているような、踊り場らしき場所に着くと思えば、また目の前に階段が続いている。

果てがないのでチャレンジする力が湧いてくるのかも知れません。展覧会の山を越えるごとに、不思議な充実感があります。主体展に出品することは、生きる原動力かも知れません。

出品をする機会を与えられた事に感謝です。

武蔵 義弘（千葉県）

主体美術との縁は、職場（都立高校）の同僚に会員の中沢志朗氏がいたことに始まる。こちらは美術ではなく、歴史が担当だったが、もともと絵が好きだったのと、氏とは帰る方向が同じで、途中京成線の立石あたりで下車してモツ焼き屋で一杯引っかけあうことがままあったことから、自分も出品するようになったのだが、主体の作風が気に入ったことも大きかった。在野色が濃く、貧乏臭さ—これは主張性があるということだが一が漲っていたからだ。最近の主体展では、プロテストの気風は薄まっているような気がする。時代のしからしめるところか。中沢氏や、氏に誘われてアトリエを訪ねたことにある川上貴一氏なども鬼籍に入つて久しい。立石のモツ焼き屋も、グルメ情報につられた遠方からの客（しばしば若い女性の姿も混じる）の行列であふれ、かつての雰囲気とは違ってしまった。

こちらは一向に腕が上達しないまま、十数年前に脳出血で倒れて右半

身がいささか不自由になったのと、元から気になっていた哲学を頭が効くうちに少しあはマスターしてみようと地元の大学の大学院に席を置いたりしたせいで、制作の方は以前ほど時間が割けなくなつた。哲学というと、えらく高尚に聞こえるかもしれないけれども、現場で追及されているのは、もっぱら「ものはなぜ見えるのか」だと「緑がかった赤はなぜ想像できないのか（補色どうだからでは答えにならない）」だと「廣作を描くロボットは制作可能か」といったことである。そういう世間的には「どうでもいいこと」に振り回され、十年かかって何とか学位を取るところまでこぎついた。今後はまた制作意欲を取り戻し、いまだに分からぬ「絵画とは何か」の実践的追及に余生を費やしたい。

山田加代子（群馬県）

2006年から主体展に出品して13年が経ちました。

高校生の時に美術部に入り油絵を初めて、東京の美術専門学校に進みました。卒業後しばらく絵を描く事から離れていて、また絵を描きたいと思い絵画教室に通い始め、そこで教えて頂いた先生が主体美術協会の方でした。それから毎年、主体展を見に行き自分も画家として活動したいという漠然とした憧れがありました。しかし久しぶりに描いた静物画は思うように描けず、100号のキャンバスと向き合えるようになるまでに更に時間がかかりました。その頃は東京から故郷である群馬に移り住んでいたので自然の風景を描きたいと思いました。四季を通して木々は色々な表情を見せてくれますが、中でも春、芽吹き始めた新緑が好きです。しかし柔らかい葉の淡い緑を描くのは難航を極め、毎年、入選出来た事を嬉しく思う反面会員の方々との実力の差を痛感します。

主体美術協会の方々は常に真摯な気持ちで作品に取り組んでいらっしゃると感じます。絵に対する追求心を見習い少しでも近づけるように取り組み、これからも出品したいと思います。

最近は長野県の八千穂高原にスケッチを行っています。白樺の群生地があり、白駒の池、駒出池が点在しています。紅葉を見に行った帰りそこからほど近い小海町高原美術館に行きました。そこで、その地で2年間滞在して制作を行ったイギリスの画家、リチャード・ホーア展を見ました。それは私が描いている白樺林であり、水辺の風景でした。

その絵の前に立った時、吸いこまれそうになりました。自分の絵を振り返ると、その洞察力の差は歴然としていました。もっと光や風を意識して外面だけでなく内面も、木に触った感触を思い出して白樺林に居る時の静謐なときをキャンバスに表現したいと思っています。

展覧会記録

2018年8月末～2019年1月末

■みつろう転写画展(榎本香菜子 他)

8月21日～8月31日

ギャラリー砂翁(日本橋)

■第33回日本の海洋画展

(佐藤善勇、手塚國彦、中村輝行 他)

8月23日～8月29日

東京芸術劇場5F展示ギャラリー(豊島区)

■小菅光夫展

9月1日～9月30日

應無寺(葛飾区)

■金オーロ遊び展(齊藤望、種倉紀昭 他)

9月2日～9月26日

アートスペース泉(福島県いわき市)

■exhibition twice up! 11 part1

(久我英輔、新島知夏、前川アキ)

9月3日～9月9日

あかね画廊(銀座4)

■吉江新二・麗子二人展

9月3日～9月8日

銀座K's Gallery(銀座1)

■gallery watanabe 30周年記念展／前期

(齋藤典久、新野安紀子 他)

9月7日～9月11日

わたなべ画廊(飯能市)

■坪井健一展

9月10日～9月16日

あかね画廊(銀座4)

■2018墨展・40周年記念

(柏木喜久子 他)

9月10日～9月20日

好文画廊(日本橋)

■第40回北海道ロビー絵画展

(佐藤善勇、續橋守 他)

9月11日～9月19日

ギャラリー絵夢(新宿区)

■第29回豊田美術連盟展

(加藤嘉巳、田中和枝、塚田勉、塚本照子、

水野博子、森伊津子、山本弘子 他)

9月12日～9月16日

豊田市民文化会館(豊田市)

■gallery watanabe 30周年記念展／後期

(齋藤典久 他)

9月14日～9月18日

わたなべ画廊(飯能市)

■EXHIBITION by ZERO!

(井上樹里、坪井健一、中嶋修、新島知夏、

橋本礼奈、山本靖久 他)

9月17日～9月23日

あかね画廊(銀座4)

■寺田政明展 一没後30年－

9月24日～10月6日

始弘画廊(南青山5)

*展覧会案内状を機関紙担当(山田)、ホームページ担当(長沢)にお送りください。
(会員・出品者問わず掲載いたします)

2019年度事務局体制

■責任者／福田玲子

■会計／齋藤典久

■展覧会／返町勝治・結城智子・園田雅俊

■広報／【図録・出版】桑原雄一・久我英輔

【機関紙】藤田俊哉・山田礼二

【発送】柿崎 覚 【広告】黒川 洋

◆巡回展／名古屋：水谷幸子 神戸：森 慎司 ◆ホームページ／長沢晋一

2019年 第55回記念主体展 日程

本 展／東京都美術館(上野公園)

2019年9月1日(日)～9月16日(月)15日間(2日は休館)

公募搬入／2019年8月22日(木)・23日(金)東京都美術館地下室

※巡回展、研究会等詳細はホームページにて。

- 茨城の美術セレクション(福田玲子 他)
9月27日～10月7日
茨城県天心記念五浦美術館(北茨城市)
- 闇展III(井上樹里 他)
10月1日～10月7日
あかね画廊(銀座4)
- 〈象の内・外〉2018(長沢晋一 他)
10月1日～10月10日
ギャラリー絵夢(新宿区)
- 種倉紀昭個展
10月1日～10月30日
ギャラリースペースけやきラウンジ(花巻市)
- 岩見健二油絵展
10月11日～10月17日
渋谷・東急本店8F美術画廊
- 柿崎覚油絵展
10月11日～10月17日
渋谷・東急本店8F美術画廊
- 松本俊介 アトリエの時間(大野五郎、寺田政明、未松正樹、吉井忠 他)
10月13日～12月2日
大川美術館(群馬県桐生市)
- 工藤悦子個展
10月18日～10月23日
道新ぎゃらりー(札幌市)
- 原田文子展
10月29日～11月3日
櫻画廊(銀座7)
- 時のかたち小品展
(中嶋修、結城智子 他)
10月29日～11月10日
ギャラリーセイコウドウ(銀座1)
- 七つの視点(黒木孝子 他)
10月31日～11月11日
茶廊法邑(札幌市)
- 齋藤典久展
11月4日～11月18日
ギャラリーユニコン(川越市)
- 風越しの向こうまで(大口満 他)
11月9日～11月25日
ギャラリー風(銀座8)
- 岡本裕介個展
11月6日～11月11日
ギャラリー中井(京都市)
- 第32回NHK厚生文化チャリティ展
(藤田俊哉 他)
11月8日～13日
名古屋三越栄店
- そ・れ・ぞ・れ・の今展(田中和枝 他)
11月9日～11月25日
あとりえシトロエン(豊田市)

■〈風土〉に生きる・V(柏木喜久子 他)

11月12日～11月17日

ギャラリー風(銀座8)

■戸田礼子展

11月12日～11月17日

アートスペース羅針盤(京橋3)

■VENUS Exhibition(松本恵美 他)

11月12日～11月24日

ギャラリーセイコウドウ(銀座1)

■第58回神奈川県女流美術家協会展

(森脇ヒデ、内田結美子 他)

11月28日～12月3日

横浜市民ギャラリー(横浜市)

■2018「内在する日常展」VI

(荒木篤子 他)

11月29日～12月4日

ArtSpace88(国立市)

■画業60年 中島佳子展

11月29日～12月5日

ゆめたろうプラザ(武豊町)

■銀座アート動物園2018

(戸田礼子 他)

12月1日～12月7日

薔薇画廊(銀座7)

■華・華・展(松本恵美 他)

12月3日～12月8日

ギャラリー風(銀座8)

■第5回ボローニア展(種倉紀昭 他)

12月4日～12月9日

埼玉県立近代美術館B1、第3展示室

(さいたま市)

■白と黒の間に展

(柏木喜久子、長沢晋一 他)

12月10日～12月15日

ギャラリーGK(銀座6)

■「セルゲイ君のベラルーシ」写真展

+榎本香菜子小品展

12月10日～12月16日

画廊「楽」2F(横浜市)

■第5回ポールベンアート展

(高橋玲奈 他)

12月10日～12月16日

GINZA STAGE・1(銀座1)

■主体美術中部作家研究展

12月11日～12月16日

東桜会館ギャラリー(名古屋市)

■3人展(伊藤博昭、富田昭正 他)

12月11日～12月25日

米沢アートステーション(米沢市)

■續橋守絵画展

12月19日～12月24日

ラディアン展示ギャラリー

(神奈川県二宮町)

■大口満絵画展

12月22日～12月26日

京都市教育文化センター(京都市)

2019年

■蟻々展

(有馬久二、佐藤善勇、手塚國彦)

1月7日～1月13日

銀座アートホール1F(銀座8)

■第11回山口長男☆野見山暁治と実專展(長沢晋一 他)

1月7日～1月13日

銀座ギャラリームサシ(銀座1)

■山本靖久展

1月7日～1月15日

コートギャラリー(国立市)

■新春ガラス絵展

(中城芳裕、中村輝行、山本靖久 他)

1月14日～1月19日

ぎゃらりい サムホール(銀座7)

■第2次フェノメナ'19

(中村輝行 他)

1月14日～1月26日

始弘画廊(南青山5)

■PREMIER STAGE展

(柏木喜久子、高橋玲奈 他)

1月16日～1月24日

銀座STAGE・1(銀座1)

■浅野修(虚と実)展

1月16日～1月26日

銀座K'sギャラリー(銀座1)

■パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展(小野由紀子、柏木喜久子 他)

1月17日～1月22日

相模原市民ギャラリー(相模原市)

■色の美学・形の詩学

(柏木喜久子 他)

1月21日～1月26日

ギャルリー志門(銀座6)

■小野絵麻・三ニ・絵里展

1月21日～2月2日

Art space Kimura ASK?(京橋3)

■白・黒展(長沢晋一 他)

1月21日～1月26日

ギャラリー風(銀座8)

■M-art'79展(山崎弘 他)

1月28日～2月2日

画廊宮坂(銀座7)

■主体展秀作作家(2018)と会員小品展

1月31日～2月11日

ヒルトビアアートスクエア(新宿/ヒルトン東京B1)

東日本震災遺児教育資金への寄付のお願い

主体展会場で販売した機関紙の売上金は、公益財団法人「みちのく未来基金」へ寄付いたします。今年もご協力をよろしくお願いします。

編集後記

■54回展での石内氏の講演は、写真家の手から直接作品の解説をお聞きできる貴重な講演会でした。表現手段が違うだけで、思考する過程は絵画でも同じだと思います。今回はいわさきひろとの繋がりから、はからずも事前の情報が入り、遠い存在だった人がひじょうに身近に感じました。55回記念主体展ではどんな出会いがあるのでしょうか。

(山田礼二)

■「ぼうふら一匹も殺してはいけない」そんな慈悲深さを持つ良い父であったと、子息の寺田農さんが語る寺田政明氏。美術評論でも活躍、児童書などに挿絵を描き「土民派」を自称したという吉井忠氏。お二人とも戦前戦後にかけて日本美術史を飾る鋤々たる画家達と親交が深い。主体創立期を支えた先達の仕事に対面できる55回企画展示室が楽しみです。

(藤田俊哉)